

まかつとう 摩羯灯 — および、その関連する問題について

孫 機

翻訳：中村 亜希子（奈良文化財研究所）・神野 恵（奈良文化財研究所）

内蒙古ジェリム盟 フレー旗 5 号遼墓出土の白瓷の盞（図 1-1）は、発掘概報では「魚龍形水盂（すいう）」^①と呼ばれる。遼寧北票水泉 1 号遼墓出土の青瓷の盞（図 1-4）は、前者と造形が非常に似ており、発掘概報では「魚龍形青瓷水盂」^②、大型図録の『遼寧省博物館』では「青瓷飛魚形水滴（すいてき）」^③と呼ばれる。これらが、水盂もしくは水滴 かどうかについては、再検討の必要がありそうである。特に、後者の前方には水を注ぐ注口としての角度がなく、腹部の内側は 2 つの部分に分かれ、その間を後部に向かって湾曲する高い隔壁が隔てている。水盂として使用するのであれば、後部内の水をスムーズに前方部に移し入れる必要があるが、それはとても困難である。以上の 2 点と形が似た瓷盞が、国外に流出したものにも 1 点存在する（図 1-3）。この盞は白瓷褐彩で全体に鱗紋が半肉彫りにされている。尾部が反り上がって把手となり、口縁部前方には龍形のような獸頭が付き、その下部が大きな注口になっている。器の底部には蓮弁座状の高台が付く。その形態を見ると、間違いなく灯盞である。日本の大阪市立美術館編『宋元の美術』にこの器が収録された際も、灯と記された。再度、前の 2 点をみると、水を入れる容器とするよりは灯とする方が根拠は多いと言えるだろう。フレー旗 5 号墓では、銅製の灯檠 1 点（図 1-2）が上述の瓷盞と一緒に出土した。その上部は上向きに湾曲しており、瓷盞の丸い底部にぴったりと合う。灯檠で灯盞を受ける例は、宋や元の遺物に多い。よって、この盞を灯としても、そう問題はないようである。ただし、水泉 1 号墓出土の盞も灯であるとするには、より慎重な分析が必要である。なぜなら、この器には由来の異なる複数の要素が含まれており、一見すると一般的な灯とは異なって見えるからである。

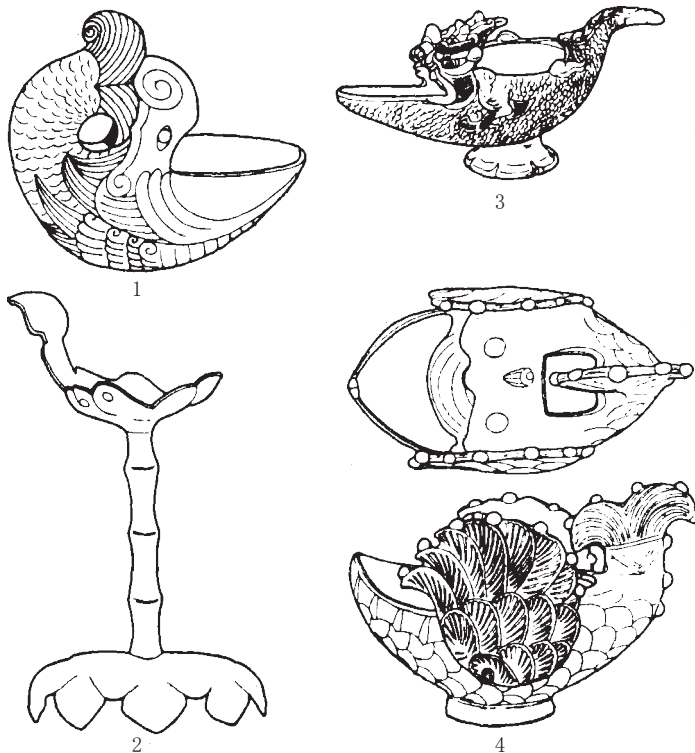


図 1

1. 白瓷盞（内蒙古フレー旗遼墓出土）
2. 銅灯檠（内蒙古フレー旗遼墓出土）
3. 白瓷盞（伝世品）
4. 青瓷盞（遼寧北票遼墓出土）

魏晉以前、わが国伝統の古い灯は、どのような形であっても、点灯する方法、すなわち灯芯（炷）と灯盤（盞）の関係がすべて「盞中立炷式」であった。例えば、漢代で最も一般的な豆形の灯は、円形の灯盤の中央にしばしば釘状の尖った突起（支釘）がついている（図2-1）。研究者はあるいはこれを「燭針」と呼び、漢代の灯をその有無によって油灯と燭灯の2種類に大別する。しかし実際には、漢代には単独で灯す燭以外に、油灯の灯芯も燭と呼ばれていた。さらに厳密に言えば、前者は廣燭もしくは麻燭と呼ばれ、後者は灯自体を含む全体が膏燭と呼ばれた。『淮南子・説林訓』には「廣燭輒，膏燭澤。」とある。『周礼・司烺氏』の鄭衆による注釈には「蕢燭，麻燭也。」とあるが、それは麻蕢（皮を剥いだ後の麻の茎）を束に縛って灯した照明のことである。膏燭の灯芯にも麻蕢を用いたが、もちろん、麻燭の束に比べるとはるかに細かっただろう。麻蕢は又の名を蒸という。『説文・艸部』には「蒸，析麻中幹也。」とある。油灯の灯芯にした燭は、それ自体が灯の構成要素であるため、ある銅灯の銘文では灯そのものの名を「燭錠」^④と記す。燭と灯は繋がってひとつの言葉となり、それと『淮南子』の「膏燭」は実際には同じものを意味する。漢の劉子駿『灯賦』では、ある鶴形の灯を描写して「惟茲蒼鶴，……負斯明燭。」と言う（『芸文類聚』巻80引用）。灯の上に燭を用いたことが分かる。このような灯と燭の関係について、最も分かりやすく叙述したのは桓譚である。『新論・祛蔽（きょへい）篇』には「餘後與劉伯師夜燃脂火坐語，燈中脂索而炷焦禿，將滅息。……伯師曰：燈燭盡，當益其脂，易其燭……。餘應曰：人既稟形體而立，猶彼持燈一燭，……惡則絕傷，猶火之隨脂、燭多少、長短為遲速矣。欲燈燭自盡易以不能，但促斂旁脂以染漬其頭，轉側蒸乾使火得安居，則皆復明焉。」とある。ここで言う「燃脂火」は、すなわち油灯を点すことであり、「持燈一燭」は麻蒸で作った灯芯を示す。灯芯は一般的に灯盤中央の支釘に挿される。この支釘は『説文・火部』の「主，鑪中火主也」という火主であり、篆文の描写は非常に分かりやすい。主の字は後に炷の字となり、すなわち灯芯を指す。沂南と鄧県長塚店の画像石および山西大同の司馬金龍墓出土の漆屏風に線刻された灯（図2-2・3・5）では、灯火はみな盤上に立っており、「盞中立炷式」の灯を描写する。麻蒸は遺存しにくい、雲南昭通佳家院子の後漢墓で出土した銅製の灯には、灯盤内に灯芯が一部残存する。この灯芯は8、9本の竹ひごを一緒に撚って作ったものである^⑤。麻蒸を用いる場合も、作り方は似たようなものだろう。ただし、火主には支釘形を呈するもの以外に、管形で管の内部に灯芯を挿すものもあり、これも盞中に立てることができる。新疆モンゴルキュレ県シャーテの漢代烏孫墓で出土した陶灯は、灯盤の中に管形の火主が2つある^⑥（図2-4）。いうまでもなく、太い麻蒸の上に細い麻蒸を束ねるようにすれば、火主を用いずとも直接灯盤上に立てることもできるはずである。漢代の銅灯に火主がみられないものがあることこそ、こういった方法の存在を反映しているのかもしれない。晋の傅玄『灯銘』には、「素膏流液，玄炷亭亭。」（『初学記』巻25引用）とあるが、すなわち灯芯がびんと直立する姿を示している。

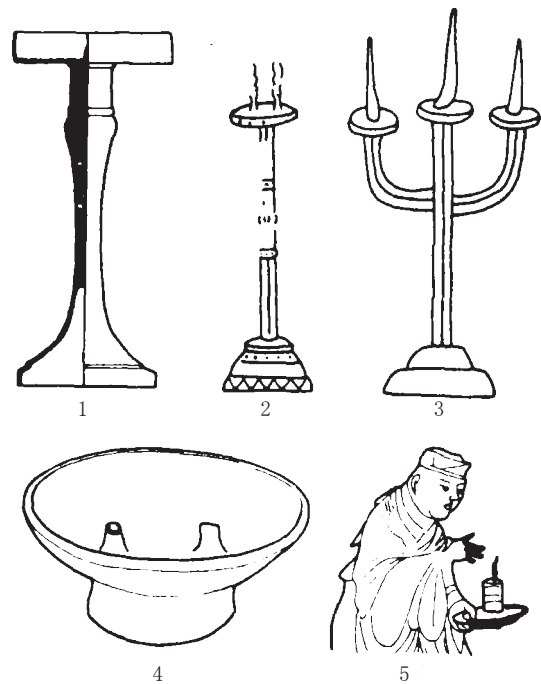


図2「盞中立炷式」灯

1. 銅灯（満城漢墓出土） 2. 沂南漢画像石上の灯
3. 大同司馬金龍墓漆屏風上の灯 4. 昭蘇出土漢代陶灯
5. 鄧県画像石上の灯を持つ人物

『新論』ではまた、灯火は「随脂、燭多少、長短為遲早」とし、燭すなわち灯芯が脂に浸されていることを表す。脂は動物性油脂を指すが、満城1号墓出土の卮灯内の残存物は、化学分析を経て動物性油脂であることが判明した^⑦。その他、古代には植物油も火を灯すのに用いた。『齐民要术・種麻子篇』が崔寔を引用して言うには、「苴麻（即大麻の雌株）子黒、又實而重、擣治作燭、不作麻。」とある。同書の『荏蓼篇』にも「荏（即白蘇子）油色緑可愛、其気香美、……又可以為燭。」とある。ここでいう「作燭」と「為燭」はともに灯りを点すことを指す。元代に至っても、王禎は『農書』巻7において「按麻子、蘇子、……於人有燈油之用、皆不可闕也。」と説く。動物の脂と植物油以外に、蠟もまた火を灯すのに用いた。『潜夫論・遏利篇』には「知

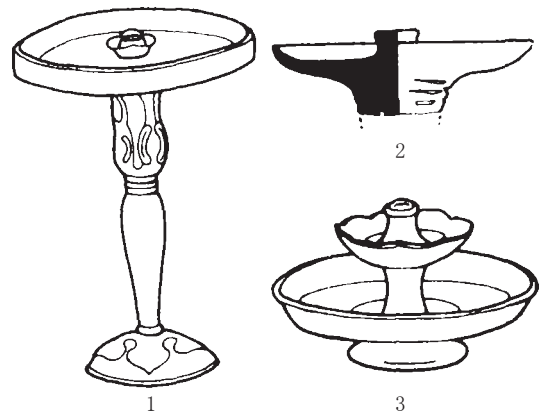


図3

1. 故宮博物院蔵戦国玉灯 2. 長沙出土漢代陶灯
3. 安陽隋張盛墓出土陶灯

脂、蠟之可明燈也。」とある。解放前、商承祚氏は『長沙古物見聞記』において「漢墓では時に黄色の円盤状の蠟が発見される。……膏の代わりだろうか」と指摘した。解放後、長沙楊家大山401号墓や沙湖橋A45号墓等の漢墓では、銅灯内で蠟の残存物が発見された^⑧。蠟を膏の代わりとした証と言えよう。晋の范堅が『蠟燈賦』でこの種の蠟を燃やす灯について描写して「列華檠、鑠凝蠟。浮炷穎其始燃、秘闔於是乃闔。」（『芸文類聚』巻80引用）という。灯の中の蠟は融かして油膏として使用しており、細い柱状の蠟燭を作ったのではないことが分かる。この種の銅灯は范堅の賦では蠟灯と呼称され、燭台とは呼ばれていない^⑨。

上述した各種の灯の中では、言うまでもなく脂や油、あるいは蠟を燃やしており、灯芯の大半には麻蒸などの硬い繊維が用いられたため、直接火主の上に挿すことができた。他に、当時は軟らかい繊維で作った灯芯も用いられた。軟らかい灯芯は立たないので、本来「盞中立炷式」の要求を満たさない。しかし、この方法が流行した時期には、後世とは異なる昔からの習慣が踏襲されており、軟質の灯芯を盞の口縁に立てかけ、灯盤の口縁部で灯火を燃した。もしくは、灯盤内に小さな丸い台がひとつ立っており、柔らかい灯芯をこの台に立てかけて燃した。戦国時代から隋代においては、いずれもこの種の灯火器の例が見られる（図3）。

古代の西方の点灯方法は中国とは異なる。西方の灯の片側には注口があり、灯芯を注口内に引き入れ、盞の口縁部に立てかけて灯しており、「盞唇搭炷式」と呼称できる。古代の地中海地域と西アジアの各国では、みなこの型式の灯を用いていた。図4-1のパルティアの施釉陶灯を例として挙げる^⑩。この種の灯はおよそ唐代には新疆を経由して内地に伝わっており、新疆マラルベシ県のトックズ・サライで出土した唐代の銅灯^⑪（図4-2）は純粋な西方様式に属する。石渚長沙窯出土の注口付き瓷灯^⑫（図4-3・4）は、形は西方の灯と異なるが、盞唇搭炷式の方法を採用しており、疑いなく外来の影響を受けている。この種の灯の流行を受けて、軟質の灯芯も普及した。『舊唐書・皇甫無逸傳』には、無逸が「夜宿人家、遇燈炷盡、……無逸抽佩刀斷衣帶以為炷」とあり、これを証明する。宋代以降は普遍的にこの種の灯が用いられ（図4-5・6）、「盞中立炷式」の灯は消失し見られなくなった。灯盞の構造の簡略化に伴い、戦国時代から前後漢代まで隆盛を極めた銅灯工芸は衰退した。六朝や隋唐時代には、まだ稀に造形が非常に美しい瓷灯が見られるが、宋代以降は滅多に見られなくなった。そのため、フレイ旗5号墓で出土した銅灯檠と瓷盞は後期の灯火器の中では極めて貴重な優品となっ

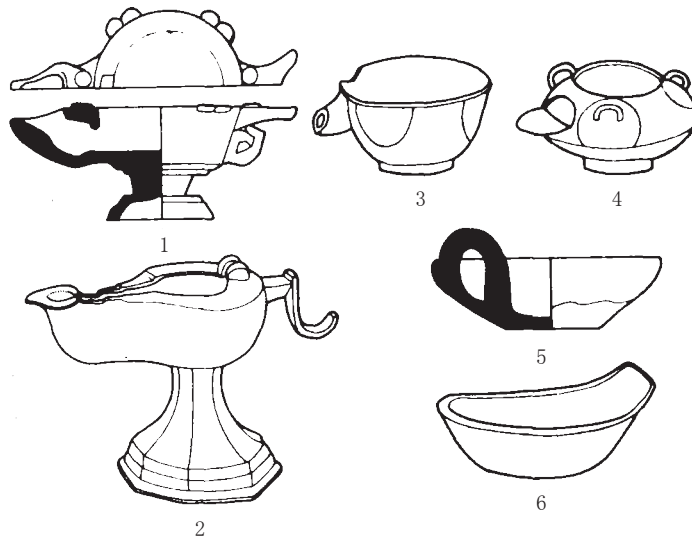


図4 盞唇搭柱式灯

1. パルティアの陶灯
2. マラルベシ出土唐代銅灯
- 3・4. 石渚長沙窯出土唐代瓷灯
5. 建陽窯宋代瓷灯
6. 開原出土元代鉄灯

ている。

ただし、フレーの瓷灯の意匠は「魚龍」ではなく、インド神話の摩羯魚から来たものであるということは指摘しておかなければならない¹³⁾。この種の水の中に住む架空の怪物は、仏教経典やインドと中央アジアの工芸品、ならびに、天文学の黄道十二宮における摩羯宮等の経路を辿って我が国に伝来した。その長い鼻は上に巻き、獣の頭と魚の体をもつ形をしており、フレーの瓷灯の造形と合致する。遼代の製灯工芸家はこの意匠を巧みにあしらっており、フレーの灯のそれは、後ろに巻く鼻と前に伸びる尾が寄り添い、後部が把手を形成し、底部が灯檠のカーブに合うように作られており、非常に生き生きと描写されている。その名称は摩羯灯と定められよう。国外に流失した1点は、頭部が龍形に近いが、実際にはこれも摩羯魚である。摩羯魚の頭部は、古くは唐代の工芸品において既に龍に近い形に表現されているからである（図5-1）。同時に、インドと中央アジアの摩羯魚には本来翼がないが、唐代の作品でも初期にはなかった。これが、中晩唐時期になると金銀器に打ち出した摩羯魚に翼が付けられるようになる。西安の太乙路で出土した四曲金杯と丹徒丁卯橋出土の鎏金銀盤はどちらもその例である¹⁴⁾。遼や宋の文物における摩羯魚も同様である（図5-2・3）。我が国で描かれた黄道十二宮の摩羯宮においても、既知の三例に関して言えば、みな有翼の飛魚の形を表現する（図5-4～6）。既知の水泉遼墓の青瓷盞もおそらく摩羯灯ではあるが、すでに摩羯の頭部が省略され、魚の体と双翼だけが作られている。

遼代には摩羯魚の意匠に対して特別な愛好があったようである。上述した水泉遼墓では摩羯灯以外に摩羯紋の銅製飾り板と摩羯形の石墜が出土した¹⁵⁾。故宮博物院には、遼代の鎏金摩羯紋銅製帶金具が収蔵されており、^{かたい}帯^{だび}鈎と鉞尾が含まれる¹⁶⁾。陶瓷容器では、かつて内蒙古寧城で遼三彩摩羯壺が出土しており¹⁷⁾（図5-7）、日本で刊行された『世界陶磁全集』巻10には遼代の白瓷摩羯壺¹⁸⁾が1点収録されている（図5-8）。したがって、上述の三例の摩羯灯もおそらくみな遼代の製品だろう。フレー旗出土品は赤峰缸瓦窯村の瓷器窯の製品である可能性がある。水泉出土品については、許玉林氏がその「胎土、釉色、焼成技術と装飾の風格が、みな同時期の汝窯や耀州窯、龍泉窯などの青瓷とはまったく異なる」¹⁹⁾とする。その窯の帰属はまだ未確定ではあるが、おそらく遼の地で焼成したものとみられる。

最後に、再び水泉の摩羯灯の腹部内を二つの部分に隔てる原因について推測を試みる。原理的には、

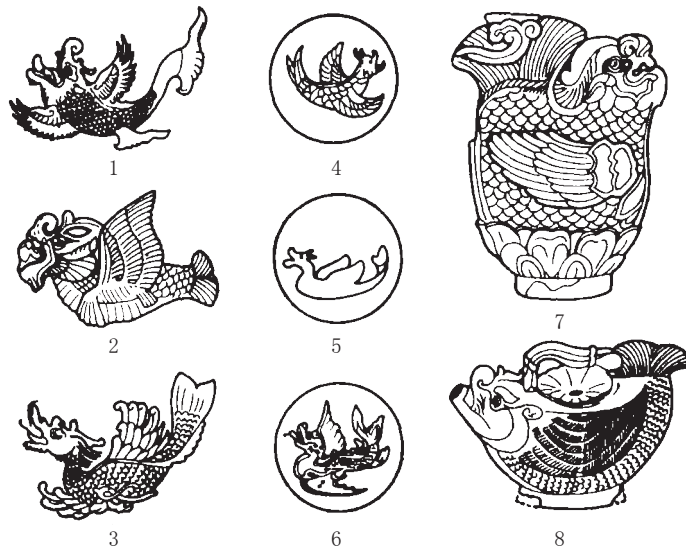


図 5

1-3. 摩羯紋

(1. 丹徒出土唐代鎏金銀盤 2. 北票出土遼代石墜 3. 定窯址出土宋瓷片)

4-6. 摩羯宮

(4. 応県木塔発見遼代版画「熾盛光仏と九耀図」 5. 宣化遼墓壁画 6. 莫高窟 61窟西夏壁画)

7-8. 摩羯壺

(7. 寧城出土遼三彩壺 8. 伝世遼白瓷壺)

それは宋代の夾瓷盞と基本的に同じである。宋の陸游は『陸放翁集・齋居記事』において「書燈勿用銅盞，惟瓷盞 最省油。蜀中有夾瓷盞，注水於盞唇竅中，可省油之半。」という。ここでは油の節約の理由については言及していない。陸游は『老學庵筆記』巻 10 の中で、さらに「宋文安公（宋白）集中有省油燈盞詩。今漢嘉（四川蘆山）有之，蓋夾燈盞也。一端作小竅，注清冷水於其中，每夕一易之。尋常盞為火所灼而燥，故速乾。此獨不然，其省油幾半。邵公濟牧漢嘉時，數以遺中朝士大夫。按文安公亦嘗為玉津令。則漢嘉出此物幾三百年矣。」と説明する。今の四川邛崃県の鄧窯窯址では、かつてこの種の灯が出土した。邛崃と蘆山は隣県であり、陸の説を証明する。重慶市博物館は完形の優品を所蔵しており、湖南岳陽と天津市でもかつてこの種の灯が出土したことがある。伝播した地域がかなり広範であったことが見てとれる。省油灯の構造はおおよそ図 6-1 のようであり、水泉の摩羯灯の構造は図 6-2 のようである。まさに、水泉の灯の腹部後部に冷水を注ぎ入れ、前部に油を盛り灯芯を置くのである。瓷盞は冷水によって温度が下がるため、灯油の蒸発は減少し、油を節約する目的を達する。

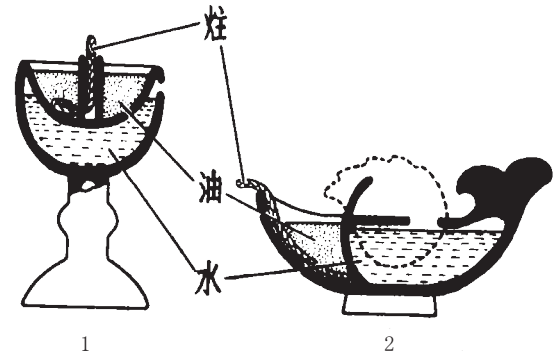


図 6 2 種類の省油灯の構造概念図

1. 鄧窯出土 2. 北票出土

摩羯灯は「盞唇搭炷式」の点灯法を採用しており、その起源は西アジアや地中海地域にまで遡ることができる。造形は摩羯魚を模倣し、元はインド神話に由来するが、さらに、唐代における改変と再創作を経ている。注水し油を節約する構造は、邛窯の夾瓷盞を倣っている。遼代の工芸家たちはたくさんの工夫を凝らし、このように優美な造形と精巧な構造を併せもつ摩羯灯を創造したのであり、実に我が国の工芸史上注目に値する傑作となっている。

訳註

- ① 哲里木盟博物館「庫倫旗第5、6号遼墓」『内蒙古文物考古』1982年第2期
- ②・⑮・⑲ 遼寧省博物館「遼寧北票水泉一号遼墓発掘簡報」『文物』1977年第12期
- ③ 遼寧省博物館編『遼寧省博物館』文物出版社・日本講談社1983年、図171
- ④ 例えば、『宣和博古図』収録の「王氏銅虹燭錠」がある。
- ⑤ 雲南省文物工作隊「雲南昭通佳家院子東漢墓発掘」『考古』1962年第8期
- ⑥ 王明哲・王炳華『烏孫研究』新疆人民出版社1983年、図版10
- ⑦ 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处『満城漢墓発掘報告』文物出版社1980年上冊71頁と、③の文献を参照。
- ⑧ 中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』科学出版社1957年の115頁、及び、李正光・彭青野「長沙沙湖橋一带古墓発掘報告」『考古学報』1957年第4期
- ⑨ 後漢後期にはすでに細い柱状の蠟燭がある。広州の東山三育路や先烈路、官洲郷などの地の後漢墓では一群の最古の燭台が出土した。『広州漢墓』文物出版社1981年の411-412頁参照。
- ⑩ この灯はアメリカ・ミシガン大学古典考古学博物館収蔵で、『A. U. Pope, A Survey of Persian Art』巻2の664頁に収録。
- ⑪ 新疆维吾尔自治区博物館編『新疆出土文物』文物出版社1975年、図178
- ⑫ 周世栄「石渚長沙窯出土の瓷器及其有関問題的研究」『中国古代窯址調査発掘報告集』文物出版社1984年
- ⑬ 摩羯魚はサンスクリット語の makara の訳名である。後秦の弗若多羅（ブンヤタラ）訳『十誦律』巻33には「摩羯魚……此等在海中未足為奇，有百由旬者，二百、三百乃至七百由延身。」とある。唐の金俱叱が翻訳した『七曜攘災決』にも「摩羯」が書かれている。ギリシャの天文学における摩羯宮（山羊座）の図案は半分が羊で半分が魚状であるため、訳名には適宜羊偏の羯の字を用いた。岑蕊の「摩羯紋考略」『文物』1983年第10期を参照。
- ⑭ 賀林・梁曉青・羅忠民「西安発現唐代金杯」『文物』1983年第9期、および、丹徒県文教局・鎮江博物館「江蘇丹徒丁于橋出土唐代銀器窖藏」『文物』1982年第11期
- ⑯ 王海文「鑲金工藝考」（『故宮博物院院刊』1984年第2期）収録。文中ではこれを元代のものとするが、不確かである。なぜなら、鈐上の「古眼」はまだ唐の製品に近いからである。北宋中期以降は、鈐上の「古眼」は一般的にすでになくなっていく。
- ⑰ 白俊波「内蒙古寧城出土遼代三彩壺」『文物』1984年第3期
- ⑱ 馮永謙「新発現的幾件遼代陶瓷」『文物』1981年第8期を参照。

【付記】

本稿は『文物』1986年第12期の74-78頁に掲載された孫機氏の論文「摩羯灯一兼談与其相关的問題」の和訳である。東アジアの古代灯火の研究するにあたり、氏が指摘する盞中立炷式と盞唇搭炷式の点灯方式の概念や、灯芯の種類・材質に関する考察は極めて重要な指摘である。しかし、原文には漢籍や中国考古学の用語を多く含み、多くの日本人の研究者にとっては、読み進め理解するのが非常に困難である。

翻訳者のうち中村は、2019年10月末に北京を訪れた際、偶然にも中国国家博物館の食堂で孫機氏ご本人にお会いする機会があった。その後、同博物館の王方氏を通してご連絡し本論文の翻訳・掲載をご快諾いただいたため、本報告においてご紹介できることとなった。お二人には心からのお礼を申し上げたい。また、漢籍部分の和訳にあたっては、奈良文化財研究所の畑野吉則氏のご教示を受けた。極めて専門的な論文であり、訳文中には適宜、用語に関する訳注を付したが、解釈の誤り等については翻訳者が責を負うものであり、読者諸氏においてはぜひ原典についてもご参照されたい。